

吉田正生先生のご退職にあたって

三木 一彦

文教大学教育学部社会専修では、推薦入試合格者への入学前課題の一つとして、各教員がそれぞれ指定した本から選ばせる形で、読書レポートを課している。そこで数年前まで吉田先生が提示されていたのが、ポール＝ウィリス著『ハマータウンの野郎ども』（ちくま学芸文庫）であった。この著作は、イギリスの中等学校の「落ちこぼれ」に焦点をあて、その当事者らへの詳細なフィールドワークから、学校教育と労働文化や社会階級との関係性を論じたものである。本小稿を草するにあたり、同著を通読し、吉田先生とのこれまでの関わりを振り返ってみて、いささか得心のゆく部分があった。

というのは、先生は社会科教育をご専門とされながらも、その関心の幅は決して狭い枠にとどまることなく、社会全体を見渡した上で、「社会科教育とは何か」、「社会科教育の内容はどうあるべきか」という問題を考えておられたからである。2019年9月に「最終講義にかえて」行なわれた講義の標題も、「歴史家になるわけでもない子どもたちになぜ、歴史を教えるのか」というものであった。「ハマータウン」に似て町工場の多い東京都大田区で生まれ育ち、千葉県公立小学校教員という現場から職業人生を始められたご自身の経歴も、先生の思考の背骨をなしているのであろう。

吉田先生が北海道教育大学旭川校から本学に着任されたのは、2010年4月であった。社会専修では10年間お世話になったことになり、2015～16年度に専修主任を務められたほか、保育・教職実践演習の立ち上げ時に委員長としてその制度設計にたずさわられたことは、教育学部、さらには越谷キャンパス全体への貢献という点で特筆されよう。また在職の最終年度は特任教授というお立場で、本来であればほとんどの校務が免除されるにも関わらず、「仕事が好きですから」と、教育実習生の指導やオープンキャンパスの担当に前年度同様にあたってください、研究室運営の上で大いに助けられた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

先生がもう一つ「好き」だったのは、学生たちとの関わりである。吉田ゼミは、基本的に3・4年生の二学年合同で行なわれ、ときに2コマを超えるような濃密さを有していたが、多くの学生が先生のご指導を受けながら自らを磨き、教員をはじめとする各方面に巣立っていった。その一方では、学生たちとカラオケに興じたり、秩父などに出かけて趣味のカヤックを共に楽しんだりされていた。一見強面で辛口だが、内に情をたたえた先生のお人柄にひかれたであろうゼミの卒業生たちは、「最終講義」時にも多くの懐かしい顔を見せていた。

上にあげた以外にも、植物関係や映画鑑賞（何人かの先生とジブリ映画を観る会を催されていた）など、先生のご趣味は多岐にわたっている（まだまだ知られざる一面をお持ちかもしれない）。ご退職によって当面の「仕事」はなくなることになるが、そのような先生のこと、これまでもまして豊かな人生を歩まれるに違いない。

（みき かずひこ 文教大学教育学部学校教育課程社会専修主任）